

手紙

(「美しい村」ノオト)

堀辰雄

青空文庫

一 丸岡明に

一九三三年六月二十日、K村にて

こつちへ來てから、もう二十日になる。それなのに、まだ何も仕事をしないで、散歩ばかりしてゐる。この頃の散歩道としては、あのM病院の向うの、小川に沿つた一本道がそれはいい。アカシアの花がいま眞つ盛りだ。何ともかんと云へぬ好い香りがして、その下を歩いてゐるとぞくぞくしてくるくらゐだ。そこでM博士らしいものを見かける。いつもパイプをくはへて、生墻（病院の裏）の方へ身をこごめながら、注意深さうにその枝などを調べて

る。野薔薇が一めんに蕾をつけてゐるんだ。いまにも咲きさうだ。今朝も、そこへ行きがけに、まだ釘づけになつてゐる教會の前を通つたら、私の知らぬ間に、眞つ白な花を咲かしてゐる、大きな木が二三本あるのに始めて氣がついた。そしてその花が風もないのにぼたりぼたりと散つてゐる下で、村の子供たちがバスケットボールをやつてゐるところは、さながら一枚の繪はがきだつた。しばらく僕は立ち止つて見とれてゐたが、そのうち男の子の一人がするするとその木に登つていつた。すると木の下から他の子供が「嗅いでみなア……いい匂がするぜ」と叫んだので、その木の上の子供は手をのばして、花をりとつて、それを鼻へもつていつたが、「ウエツ、臭えくせ……」と言ふなり、その花を木の下

の子供へ投げつけた。僕は僕の足もとに落ちてゐたその白い花を、拾はうとしかけたところだつたが、それを聞いたので止めにした。なんだか本當に臭さうな氣がしたもんだから。一體、あれは何んといふ花なのかしらん？

昨日もこんなことがあつた。夕暮、ぶらつと、ベルヴェデエルの丘の方へ行つたんだ。すると、どうだい、そんな人つ子ひとりゐない山の中を、猫が一ぴき、のそりのそり歩いてゐるぢやないか。しかし僕がもつとびつくりしたのは、ときどきその猫に向つて、何處からともなく、すうつと音もなく飛んできてほ、その背中を掠めるやうにして過ぎ去る、一羽の大きな鳥（どうも鷹らしい）があることだ。すぐ見えなくなつたかと思ふと、また反對の

方から、すうつと飛んできては、その猫に襲ひかかつてゐる。がそれより早く、猫の方でも、きつと身構へて、その鳥に挑むやうな恰好をするんだ。ちよつとでも油斷をしたら、猫はひとたまりもなかつたんだらうね。どうなることかと僕ははらはらしてゐたが、そのうち猫は近所の空別莊の庭の中へ這入つてしまひ、それきりその鷹らしいものも姿を消してしまつたけれど、ちよつと凄かつたぜ。——おまけに、歸り途には、ひどい夕立に逢つたつけ。手近い空別莊のヴェランダに駈けこんで雨やみをしてゐたら、すつかり日が暮れてしまつた。大いに心細かつたが、なかなか面白かつた。こんな山暮らしをしてゐると、小説のやうな俗な仕事にとりかかると興味がますます無くなりさうだ。金でも來たら、氣持

を換へにN湖へでも二三日行つて來ようかなと思つてゐる。「ア
ミエルの日記」でも持つていつて讀みたいのだが、君のところ
原書は無いか。無かつたらどんな版でもいいから、一部買つて送
つてくれないか。この間、頼んだ「エルテル」と一緒に送つてく
れると仕合はせだ。なるべく早い方がいいぜ。これから僕は晝寢
だ。……

二 葛卷義敏に

六月二十四日、K村にて

一週間ばかり雨がふつて鬱陶しかつたが、今朝はとてもいいお

天氣になつたので朝飯をすますと早速散歩に行つた。そしていま腹がぺこぺこになつて歸つて來たところだ。食事の仕度の出来る間に、この手紙を書いてしまはう。今朝はサナトリウム・レエンへ行つて來たんだ。僕の好きな散歩道だが、右側は何處までも小川に沿ひ、左側には途中にサナトリウムがあるつきり、そしてそこまでは野薔薇なぞの生墻、そこから先はアカシアの竝木になつてゐる。二三日前、雨を冒してやつて來たときは、アカシアの花が眞つ盛りだつたが、今朝はもうだいぶ散つてゐた。その代り、生墻の野薔薇が一面に咲き出してゐた。川の向側にはウツギの花がこれもいま眞つ盛りだ。このへんで多く見かける小鳥は鶺鴒。今朝はその小川のほとりで二時間ばかり讀書した。この頃は雨で

も降らないかぎり、とても部屋の中などにちつとしてゐられない位に、戸外が氣持よいので、かうして讀書も大抵戸外です。仕事にはまだちつとも手をつけないでゐるが、若し出來たら、かうして戸外で書いて見ようかなどと空想してゐる。しかし仕事と言へば、何を書いたものやら、まだ見當すらつかない。僕が君に書くと言つてゐた奴、あれはもう諦めた。あれを書くことが僕に過去の苦痛を蘇らせさうだからぢやない。あれにはもうてんで氣が向かなくなつたんだ。こんなにも冷淡になれるものかと思ふ位だ。それほど、僕はこの頃の田舎暮らしに恍惚としてゐるのさ。こないまの僕の氣持に似合ひさうなパストラアルめいた物語の筋も二つ三つ考へて見たが、どうもうまく出來さうもない。もう仕様

がなかつたら、「ボタンをつけたりはづしたりするのが厭になつて自殺した」といふあの英吉利人みたいになりかけてゐた男が、こんな花だらけの高原に逃げてきて、そこで再び生に對する興味をとりもどしてゆく状態を丹念に描いて見ようかと思ふ。それなら今の僕には一番自然に書けさうだ。——ああ、腹がへつた。御飯がやつと來たんだよ。もうこんなに蠅がぶんぶんいつてゐる。左様なら……。

三 葛卷義敏に

六月三十日、K村にて

今日もまた雨だ。あんまり氣がむしやくしやするので、ちよつとした晴れ間を見て、水車の道の方へ散歩に出かけた。さうしたらチエツコスロヴァキア公使館の別荘の中から快活なピアノの音が聞えてきた。僕はその隣りの別荘の庭にはひつて、しばらくそれに耳を傾けてゐた。バッハの遁走曲フウグをやつてゐる。あの主題と應答とが代る代る現はれては消えてゐるうちに少しづつ曲が展開してゆく……そいつをまた練習のために、何回もひとところを繰り返してゐるんだ……その執拗な走法の効果が、この頃僕の中に小説のいろんなテエマがふと現はれてはふと消えてゆく、そのうちにそれが少しづつ發展して來てゐるやうな氣もする、さう言つた具合にそつくりだつた。——それを聽いてゐるうちに、僕はふ

と今度の小説の形式を思ひついたんだ。それは、主題は自分の手近かにあるどんなものでもいい。むしろそれ自身としては何ら重要さをもたないものの方がいい。ごく簡単なイデエで澤山だ。ただ、僕はそのイデエがどういふ具合に僕の中に生れ、成長し、いろんな形をとり、そしてそれがどんな思ひがけない方へ發展して行くかを、語ればいい。——ただ、問題はその「どういふ具合に」だ。それを僕はフウグ形式に平行させながら表現してやらうと思ひついたんだ。この思ひつきはいま僕を非常に楽しませてゐる。主題は、さつきも言つたやうに、どんなものでも僕の手に触れてくるものを片端から使用してやらうと思ふ。ただ、一種のアトモスフェアがあつて、それが全體を導いて行くやうにしたい。

それからもう一つの僕の欲望が、今度の作品を、さういふ音楽に近いものにさせたがつてゐるんだ。この前の手紙で僕は、いつか君に話した題材はすっかり諦めてしまつたやうに書いたけれど、實はまだあれにもすこし未練がある。ただ、それを直接に描きたくないのだ。その點で、僕は音楽家が非常に羨ましくなつてゐる。音楽はそのモチイフになつた對象なり、感情なりを、すこしも明示しないで、表現できるんだからね。だから今度の作品をそんな音楽に近いものにして、僕のそんな隠し立を間接にでも表現が出來たら、とてもいいと思ふんだ。しかしこれはなかなか難しさうだ。

四 村ぐらし

この高原へ來てから、もう三ヶ月になります。……

六月のはじめは、この村はまるつきり人氣がなくて、何處もか
しこも、花だらけだった。臆病な小鳥たちも、まだ人を恐れな
いで、よく私になついてゐたものだ。

或る日、まだ釘づけになつてゐる別荘の、入口の柵を押し開け
て、無斷で、その草深い庭の中へはひり、白く塗つてある鐵のべ

ンチに腰をかけながら、ぼんやりアンデルセンのコントを讀んでみると、まるでその物語の中からのやうに、いきなりけだもの獸くさい臭ひがしてきた。が、そのファンタスチックな臭ひがだんだん現實的になつて來たので、思はずあたりを見まはすと、何んと私の頭の眞上に、大きな栗の木の枝の一つが突き出てゐたつけが、それに栗鼠の奴が一匹登つてゐて、私の方をきよとんと見てゐるのだ。讀書してゐる私を、居睡りでもしてゐると間違へて、何か惡戯をしようとしてゐたところを、まんまと私に見つけられたと言つたやうな、ばつの惡さうな顔をして！ 私が頭を持ち上げたら、そいつはくるりと私の方に背中をむけ、一目散に、枝から枝へと飛びながら、たちまち姿を消してしまつた。が、これで、私は私の

生きたマスコット、栗鼠の奴のほひまで嗅ぐことが出来たわけだ。

私はその空別荘から出しなに、その柵にぶらさがつてゐる木札にやつと氣がついて、見てみると、それに拙劣な日本字で、かう書いてある――

「無用の者入るべからず、マツコイ」

七月にはひると、この村も、だんだん人間くさくなつて來た。私もだんだん、それまで私になつてゐた小島たちのことを、忘

れて行つた。さうして或る日のこと、散歩の時にいつも私の着ることにしてゐた、ジャケットの、丁度腕のところがいづつ綻ほころびたものやら、それが今では、誰の目にもつくくらゐ、大きくなつてゐるのに氣がついた。さうして私はやつと思ひ出す。このあひだ、私がベルヴェデエル・ヒルを散歩してゐた折のこと、花がすつかり無くなつてゐたので、その傍をちつとも氣づかずに通り抜けようとしたら、そんな私をあたかも責めるかのやうに、かよわさうな腕で、このジャケットをしつかり捕まへた、一本の野薔薇のあつたことを。

八月になる。郵便局の横つちよの、村の掲示場には、こんな廣告が貼り出されて。

「お天狗様附近で、コリイ種の仔犬を紛失す。それを發見された方は一七二番アンドリュウス方まで届けられたし。相當の謝禮をお上げします。」

私のジャケットの破れ目がだんだん大きくなつて來たのと一緒に、こつちへ來るとき新しく買ったばかりの、私の靴も、毎日の

散歩のため、いつの間にやら、その底に大きな孔があきだした。それから気がついて見ると、私のソフト帽も、こいつはずるぶん使ひ古した代物だが、今にもその折目がやぶれかかつてゐる。そこで私は先づ、老眼鏡をかけた村の靴屋のところへ、靴を修繕にやつてゐる間、ズツクの運動靴を買つて、それを穿いてゐることにした。それから、あいにく金がなかつたので、私は帽子のうちでも一番安いピツケ帽を買つた。するとその翌日、或る雑誌社からひよつくり原稿料が届いた。今度はジャケットを買ふ番だつた。私はとある運動具店へはひつて、つかうかかと眞白いジャケットを買つて、店を出てきた。さて、それらのものをみんな身につけると、私はまるでテニスの選手かなんそのやうに、身も心も輕

々となつた。これぢや、私の顔つきも、もつと彼等のやうに快活さうにしてた方がよささうだな。私の顔つきなんかどうにだつてなるんだから。——と、こんな風にして、私はラケットこそ手に持たないが、村のパブリック・コオトの傍を通るときなどは、ともすると人々から選手の一人に間違へられさうだつた。

來週から、ここのパブリック・コオトでは、テニスのトオナメントが始まるので……

五 村から歸りて

九月にはひつてから、私はやつとその村から歸つてきた。一束の原稿を大事さうにかかへて。さうして私はその村に惜しげもなく残してきた、三四枚のレコオド（バッハとスカルラッチと、ラモオと、それからプウランクの……）と一緒に、孔のあいたジャケツトと、運動帽と、運動靴とを。まるで私の拔殻のやうに。

さうして私は再び都會の眞ん中で暮らさうと思つた。

しかし私は、まるで憑き物でもしたやうに仕事をした後だつたので、私の心には大きな孔が穿たれてゐた。さうしてそれを他人にうまく隠すことが出来なかつたので、私は誰にも會ひたくなかつた。で、どうしたらこんな都會の眞ん中に一人でゐられるかと、私はその方法を捜し出した。さうしてやつと發見したのは、私の

家の、ながいこと使はない仕事場だった。それは今では物置小屋同然になつてゐた。私は其處をひとりで片づけて、その中に小さなテエブルを持ち込んだ。私がその上に頬杖をついてゐると、ちやうど私の頭の上には、天井からスキイの道具がぶらさがつてゐた。それから、すぐ目の前の棚の上には、埃だらけの鹽酸の壘だのが載つてゐた。さうして私の足許からは、護謨靴やタイヤのにほひがして來た。

そんな隠れ家がすこぶる私の氣に入つた。其處に私は毎日のやうに入り浸つてゐた。さうして私の友人たちは、私のことを旅行中だと思つてゐた。

そんな隠れ家で、私はゲエテばかり讀んでゐた。丁度私の手許

にあつた翻譯を片つ端から讀んでいつた。こんな時には、ゲエテの言葉が私の心に一番よく利くのを知つてゐたからだ。

とうとう『ファウスト』まで辿り着いた。第一部を讀み畢ると、私は何んだか寒氣がした。さうしていくぶん不安さうに、第二部に這入つていつたが、すると、私の心は急に明るくなりだした。

——ファウストが、疲れ果てて、不安らしく、草花の咲いた野に横はつてゐると、何處からともなく、

身は細けれど胸廣きエルフの群は

救はれむ人ある方へ急ぐなり。

聖ひじりにもせよ、惡しき人にもせよ、

幸なき人をば哀とぞ見る。

といふアリエルの歌が聴え、それと共に、可愛らしい精霊の一群が空に漂ひ出す第一幕劈頭の「優雅な地方」、それから又、「澤山褒められもし、毀されもしたヘレネがわたくしです」といふ有名なヘレネの獨白で始められる第三幕などを、私は心臓をときめかせながら讀んだ。

それから私は『詩と眞實』に移つて行つた。さうしてやつとその最後の章まで來かかつたとき、突然、ゲエテが

ダス・デモオニツシュ
神 異 力

なるものを持ち出してきて、その生涯中、をりをり彼の精神を左右したところの、神のものとも悪魔のものともつかぬやうな、不

可思議な力を説明してゐるところを讀み、私は思はずはつとした。それまで私を苦しめてゐた、漠然とした不安が、突然、はつきりした形をとり出したやうに思はれた。私はその數頁を何遍も讀み返した。

そのうちに私はやつとのことで平靜になり出した。そして今はもう、何事もなかつたやうな、靜かな氣持で、この本の原稿を出版者の手に委ねることも出來さうだ。

いまの私には、唯一つの懸念が残つてゐるばかりだ。しかし、それももう構はない。若し私が二三の知人の同意を得ないで、むしろその意に抗つて、これを出版した廉で、彼等から非難されるやうなことがあつても……私は知らん顔をして、ただ『詩と眞實』

の一句を口ずさんで居ればいい。

「私がお前を愛して居たからつて、それはお前に何んの関係があるんだ」

青空文庫情報

底本：「堀辰雄作品集第四卷」筑摩書房

1982（昭和57）年8月30日初版第1刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：染川隆俊

2013年5月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

手紙

(「美しい村」ノオト)

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 堀辰雄

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>